

サガレンと八月

宮沢賢治

青空文庫

「何の用でここへ来たの、何かしらべに来たの、何かしらべに来たの。」

西の山地から吹いて来たまだ少しつめたい風が私の見すぼらしい黄いろの上着をばたばたかすめながら何べんも通って行きました。

「おれは内地の農林学校の助手だよ、だから標本を集めに来たんだい。」私はだんだん雲の消えて青ぞらの出て来る空を見ながら、威張ってそう云いましたらもうその風は海の青い暗い波の上に行っていていまの返事も聞かないようあとからあとから別の風が来て勝手に叫んで行きました。

「何の用でここへ来たの、何かしらべに来たの、しらべに来たの、何かしらべに来たの。」もう相手にならないと思ひながら私はだまって海の方を見ていましたら風は親切にまた叫ぶのでした。

「何してるの、何を考えてるの、何か見ているの、何かしらべに来たの。」私はそこでどうとうまた言つてしまいました。

「そんなにどんどん行つちまわないでせつかくひとへ物を訊いたらしばらく返事を待つていたらいいじゃないか。」けれどもそれもまた風がみんな一語ずつ切れ切れに持つて行つ

てしまいました。もうほんとうにだめなやつだ、はなしにもなんにもなつたもんじやない、と私がふいつと歩き出そうとしたときでした。向うの海が孔雀石いろと暗い藍いろと縞になつてゐるその堺のあたりでどうもすきとおつた風どもが波のために少しゆれながらぐるつと集つて私からとつて行つたきれぎれの語を丁度ぼろぼろになつた地図を組み合せるときのように息をこらしてじつと見つめながらいろいろにはぎ合せているのをちらつと私は見ました。

また私はそこから風どもが送つてよこした安心のような気持も感じて受け取りました。そしたら丁度あしもの砂に小さな白い貝殻に円い小さな孔があいて落ちてゐるのを見ました。つめたがいにやられたのだな朝からこんない標本がとれるならひるすぎは十字狐だつてとれるにちがいないと私は思いながらそれを拾つて雑嚢に入れたのでした。そしたら俄かに波の音が強くなつてそれは斯う云つたように聞こえました。「貝殻なんぞ何にするんだ。そんな小さな貝殻なんぞ何にするんだ、何にするんだ。」

「おれは学校の助手だからさ。」私はついまたつりこまれてどなりました。するとすぐ私の足もとから引いて行つた潮水はまた巻き返して波になつてきつとしぶきをあげながらまた叫びました。「何にするんだ、何にするんだ、貝殻なんぞ何にするんだ。」私は

むつとしてしまいました。

「あんまり訳がわからないな、ものと云うものはそんなに何でもかでも何かにしなけいけないもんじやないんだよ。そんなことおれよりおまえたちがもつとよくわかつてそうなもんじやないか。」

すると波はすこしたじろいだようからつぽな音をたててからぶつぶつ呟くように答えました。「おれはまた、おまえたちならきつと何かにしなけあ済まないものと思つてたんだ。」

私はどきつとして顔を赤くしてあたりを見まわしました。

ほんとうにその返事は謙遜な申し訳けのような調子でしたけれども私はまるで立つても居てもいられないように思いました。

そしてそれつきり浪はもう別のことばで何べんも巻いて来ては砂をたててさびしく濁り、砂を滑らかな鏡のようにして引いて行つては一きれの海藻をただよわせたのです。

そして、ほんとうに、こんなオホーツク海のなぎさに座つて乾いて飛んで来る砂やはまなすのいい匂を送つて来る風のきれぎれのものがたりを聴いてるとほんとうに不思議な氣持がするのです。それも風が私にはなしたのか私が風にはなしたのかあともうさつ

ぱりわかりません。またそれらはなしが金字の厚い何冊もの百科辞典にあるようなしつかりしたつかまえどこのあるものかそれとも風や波といっしょに次から次と移つて消えて行くものかそれも私にはわかりません。ただそこから風や草穂のいい性質があなたがたのところにうつつて見えるならどんなにうれしいかしれません。

*

タネリが指をくわいてはだしで小屋を出たときタネリのおつかさんは前の草はらで乾かした鮭の皮を継ぎ合せて上着をこさえていたのです。「おれ海へ行つて孔石をひろつて来るよ。」とタネリが云いましたらおつかさんは太い縫糸を歯でぷつと切つてそのきれはしをぺつと吐いて云いました。

「ひとりで浜へ行つてもいいけれど、あすこにはくらげがたくさん落ちています。寒天みたいなすきとおしてそれも見えるようなものがたくさん落ちていますからそれをひろつてはいけないよ。それからそれで物をすかして見てはいけないよ。おまえの眼は悪いものを見ないようにつかりはらつてあるんだから。くらげはそれを消すから。おまえの兄さんも

いつかひどい眼にあつたから。「そんなものおれとらない。」タネリは云いながら黒く熟したこけももの間の小さなみちを砂はまに下りて来ました。波がちようど減いたところでしたから磨かれたきれいな石は一列にならんでいました。「こんならもう穴石はいくらでもある。それよりあのおつ母の云つたおかしなものを見てやろう。」タネリはにがにが笑いながらはだしでそのぬれた砂をふんで行きました。すると、ちゃんとあつたのです。砂のひとこが円くほとつとぬれたように見えてそこに指をあててみますとにくにく寒天のよなつめたいものでした。そして何だか指がしびれたようでした。びっくりしてタネリは指を引つ込めましたけれども、どうももうそれをつまみあげてみたくてたまらなくなりしました。拾つてしまひさえしなければいだろうと思つてそれをすばやくつまみ上げましたら砂がすこしついて来ました。砂をあらつてやろうと思つてタネリは潮水の来るところまで下りて行つて待つていました。間もなく浪がどぼんと鳴つてそれからすうっと白い泡をひろげながら潮水がやつて来ました。タネリはすばやくそれを洗いましたらほんとうにきれいな硝子ガラスのようになつて日に光りました。タネリはまたおつかさんのことばを思い出してもう棄ててしまおうとしてあたりを見まわしましたら南の岬みさきはいちめんうすい紫むらさきいろのやなぎらんの花でちよつと燃えているように見えその向うにはとど松まつの黒い緑みどりがきれい

に綴られて何とも云えず立派でした。あんなきれいなところをこのめがねですかして見たらほんとうにもうどんなに不思議に見えるだろうと思ひますとタネリはもう居てもたつてもいられなくなりしました。思わずくらげをぶらんと手でぶら下げてそつちをすかして見ましたらさあどうでしょう、いままでの明るい青いそらががらんとしたまつくらな穴のようなものに変つてしまつてその底で黄いろな火がどんどん燃えているようでした。さあ大変と思つてタネリが急いで眼をはなしましたがもうそのときはいけませんでした。そらがすつかり赤味を帯びた鉛いろに変つてい海の水はまるで鏡のように気味わるくしずまりました。

おまけに水平線の上のむくむくした雲の向うから鉛いろの空のこつちから口のむくれた三疋の大きな白犬に横つちよにまたがつて黄いろの髪をばさばささせ大きな口をあけてり立てたりし歯をがちがち鳴らす恐ろしいばけものがだんだんせり出して昇つて来ました。もうタネリは小さくなつて恐れ入つていましたらそらはすつかり明るくなりそのギリヤークの犬神は水平線まですつかりせり出し間もなく海に犬の足がちらちら映りながらこつちの方へやつて来たのです。

「おつかさん、おつかさん。おつかさん。おつかさん。」タネリは陸の方へ遁げながら一生けん命叫び

ました。すると犬神はまるでこわい顔をして口をぱくぱくうごかしました。もうまるでタネリは食われてしまったように思ったのです。「小僧、来い。いまおれのとこのちようぎめの家に下男がなくて困っているのだ。ごち走してやるから来い。」云つたかと思うとタネリはもうしつかり犬神に両足をつかまれてちよぼんと立ち、陸地はずんずんうしろの方へ行つてしまつて自分は青いくらい波の上を走つて行くのでした。その遠ざかつて行く陸地に小さな人の影が五つ六つうごき一人は両手を高くあげてまるで気違ひのように叫びながら渚を駆けまわっているのです。

「おつかさん。もうさよなら。」タネリも高く叫びました。すると犬神はぎゅつとタネリの足を強く握つて「ほざくな小僧、いるかの子がびつくりしてるじゃないか。」と云つたかと思うとぽつとあたりが青ぐらくなりました。「ああおいらはもういるかの子なんぞの機嫌を考えなければならぬようになったのか。」タネリはほんとうに涙をこぼしました。そのときいきなりタネリは犬神の手から砂へ投げつけられました。肩をひどく打つてタネリが起きあがつて見ましたらそこはもう海の底で上の方は青く明くただ一とこお日さまのあるところらしく白くぼんやり光っていました。

「おい、ちようぎめ、いいものをやるぞ。出て来い。」犬神は一つの穴に向つて叫びまし

た。

タネリは小さくなつてしやがんでいました。気がついて見るとほんとうにタネリは大きな一ぴきの蟹かににかわつていたのです。それは自分の両手りょうてをひろげて見ると、両側りょうがわに八本になつて延びることわかりました。「ああなさけない。おつかさんの云うことを聞かないもんだからとうとうこんなことになつてしまった。」タネリは辛い塩水しおみずの中でぼろぼろ涙なみだをこぼしました。犬神いぬがみはおかしそうに口をまげてにやにや笑つてまた云いました。「ちようぎめ、どうしたい。」するとごほいやかなせきをする音がしてそれから「どうもきのこにあてられてね。」ととても苦しそうな声がありました。「そうか。そいつは気の毒どくだ。実はね、おまえのところに下男げなんがなかつたもんだから今日きょう一人見附みつけて来てやつたんだ。蟹かににしておいたがね、ぴしぴし遠慮えんりよなく使つかうがいい。おい。きさまこの穴あなにはいつて行け。」タネリはこわくてもうぶるぶるふるえながらそのまっ暗くらな孔あなの中へはい込んで行きましたら、ほんとうに情けないと思ひながらはい込んで行きましたら砂すなを吹ふきつけて追おい込むようになりました。にわかにならざらんと明るくなりました。そこは広い室むろであかりもつき砂すながきれいにならされていましたがその上にそれはもうとても恐おそろしいちようぎめが鉢巻はちまきをして寝ねていました。(こいつのつらはまるで黒と白の棘とげだらけ

だ。こんなやつに使つかわれるなんて、使つかわれるなんてほんとうにこわい。タネリはぶるぶるしながら入口にとまっていました。するとちようぎめがううと一つうなりました。タネリはどきつとしてはねあがろうとしたくらいです。「うう、お前こゝかい、今こんどの下男は。おれはいま病びょう気きでね、どうも苦くるしくていけないんだ。（以下原稿空白）

青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年6月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2009年8月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

サガレンと八月

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>